

庖丁人

〔倭訓栞前編六〕かしはで 日本紀に饗膳膳夫、拍手等を訓せり、大古は凡そ飲饌皆木葉をもて器とす、よて葉盤、葉椀、折敷などの名あり、

〔料理無言抄〕夫膳部をかしはで又は庖丁人、公方様ニ而は御臺所衆と云、今云世上の料理人也、
〔古事記上〕於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍多藝志三面、水戸神之孫柳八玉神爲膳夫、獻天御饗之時、○下

〔古事記傳十四〕膳夫は、加志波傳と訓む、中卷にも見ゆ、書紀にも多し、○中略、名義は先いと上代には、凡て饌を木葉に盛ける其葉をば、何木にまれ總て加志波と云り、○註故饌の事を執行ふ人を加志波傳とは云なり、傳は手なり、凡て物を造る人を手人といひ、今世にも事を行ふ人を某手と云類多し、

○按ズルニ、膳夫ノ事ハ、官位部伴造篇膳部條ニ在リ、參看スベシ、

〔倭訓栞保中編二十三〕ほうちやう 莊子に見えし庖厨のことをよくせし丁子が故事によりて、宰烹する人庖丁人といひ、其用る所の櫛刀をもかく名けたる也、類聚雜要に庖丁力と見ゆ、和名抄には料理魚鳥者謂之庖丁とかけり、庖丁者の初は、山蔭中納言なりと、徒然草に見えたり、鶴の庖丁は庖人の秘するところなり、

〔倭訓栞前編四十一〕れうり○中 料理人を厨子と見えたり、

〔新猿樂記〕十一君氣裝人者、一宮先生柿本恒之、管絃并和歌之上手也、○中庖丁、料理、和歌、古歌、天下

無雙者也、

〔異制庭訓往來〕相語名譽之庖丁人所構種々料理也、即可有色々膾、様々羹、品々炙物、體々燒物也、

〔七十一番歌合〕五十七番 左

はうちやうし

大鯉のかしらを三にきりかねて片われしたる在明の月